

思いや考えを伝え合うための援助の工夫 ～「粘土遊び」における表現活動を通して～



那覇市立城北幼稚園教諭
仲盛 夫美子

目次

I	テーマ設定の理由	1
II	研究目標	1
III	研究仮説	1
1	基本仮説	1
2	作業仮説	
IV	研究構想図	
V	研究内容	2
1	思いや考えを伝え合う環境構成とは	
(1)	言葉での表現に視点を置いた伝え合う環境構成とは、	
(2)	粘土遊びを通した思いや考えを伝え合う環境構成とは	
2	教師の援助について	
(1)	言葉による表現を支えるための教師の援助の方法	
VI	保育実践	6
1	検証保育までの実践と本時の取り組み	
2	検証保育指導案	
VII	結果と考察	8
1	「作業仮説(1)」の検証	
(1)	結果【主体的な活動となるような場と素材の提示】	
(2)	考察	
2	「作業仮説(2)」の検証	
	【幼児なりの表現を出し合えるような援助】～個の育ちによる検証～	
(1)	結果	
(2)	考察	
(2)	アンケートの結果からみたH子の変容	
(1)	結果	
(2)	考察	
3	全体的な結果と考察	
(1)	結果	
(2)	考察	
VIII	研究と成果と課題	12
1	成果	
2	課題	
	《主な参考文献》	

思いや考えを伝え合うための援助の工夫

～「粘土遊び」における表現活動を通して～

那覇市立城北幼稚園教諭 仲盛夫美子

I テーマ設定の理由

幼稚園教育要領第1章総則では、「幼児期における教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なもの」とある。平成21年度の教育要領の改訂では、「人間関係」の領域が強調された。その中の「内容の取り扱い2」において、「幼児の主体的な活動は、他の幼児との関わりの中で深まり、豊かになるものであり、幼児は其中で互いに必要な存在であることを認識するようになる事を踏まえ、一人一人を生かした集団を形成しながら人と関わる力を育てていくようにすること。特に、集団の生活の中で幼児が自己発揮し、教師や他の幼児に認められる体験をし、自信を持って行動できるようにすること」が、新たに加えられた。

上記の内容から、幼児期における幼児一人一人の心身の安定を基盤とした自己発揮が大切と考える。自己発揮する過程においては、葛藤や自己抑制を通して芽生える規範意識の育ちと同時に、自信を持って自己表現できることが大切だと捉える。

本園の幼児の実態はクラスの約1/3が進級児で、園の環境には慣れている。それに対し、新入園児は新しい環境に戸惑いながら、園生活に慣れようとしている様子がみられる。園の環境に慣れている子、まだ慣れていない子のどちらにも、自信が無く思うように自己表現ができない様子がみられる。幼児自身が自信を持って様々な方法で自己表現しながら、自分の思いや考えを相手に伝えることができるようになり、さらには相手の思いや考えに気付くような他者理解をできるようになることが重要であると考え。

私はこれまで、幼児に自信を持たせるために、スキンシップを十分に図ることやほめること、幼児のありのままの姿を受容することにポイントをおいて保育実践を進めてきた。振り返ってみると十分な援助ができたとは考えにくい。幼児が自己表現したくなるような環境構成のあり方や、教師が場面に応じてどのような言葉かけをすれば幼児の自己表現を促せるのかなどの課題が見えてきた。

このように、他者理解と自己発揮のバランスのとれた幼児期の発達の道筋をたどることが小学校生活への適応など、次の発達段階へのスムーズな移行につながる大切なプロセスと捉える。

他者理解と自己発揮のバランスのとれた幼児期の発達のプロセスにおいて、重視する点を以下の2点に整理する。

- 1 幼児が自信を持って、他の幼児との関わりの中で思いや考えを表現できる環境構成の工夫
- 2 幼児が自信を持って、自己表現するための言葉かけによる援助の方法

これらのことから、発達に添った幼児が思いや考えを伝え合うための環境構成と援助の工夫について研究したいと考え、本テーマを設定した。

II 研究目標

幼児が思いや考えを伝え合うための援助について研究する。

III 研究仮説

1 基本仮説

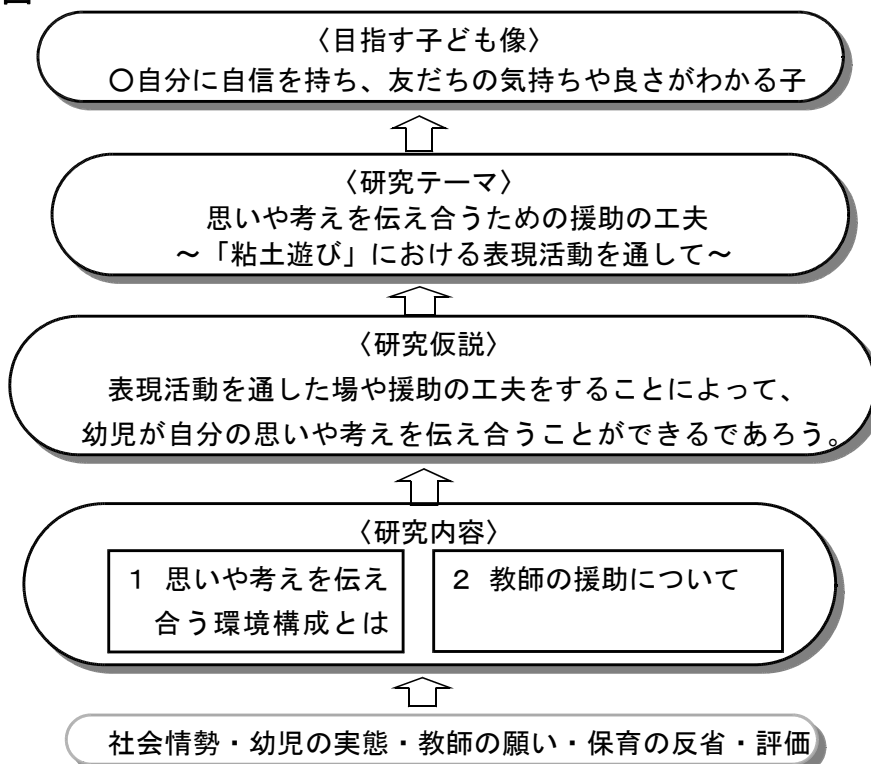
表現活動を通じた場や援助の工夫をすることによって、幼児が自分の思いや考えを伝え合

うことができるであろう。

2 作業仮説

- (1) 主体的な活動となるような場と素材の環境を構成することによって、幼児の自己表現を引き出すことができるであろう。
- (2) 幼児なりの表現を出し合えるような言葉かけ等の援助をすることによって、自分の思いや考えを伝え合うようになるであろう。

IV 研究構想図



V 研究内容

1 思いや考えを伝え合う環境構成とは

(1) 言葉での表現に視点を置いた伝え合う環境構成とは

「幼児理解と評価」（文部科学省）によると、「幼児は、その時々のおいを生活の様々な場面で表現しており、言葉だけでなく表情や動きといった身体全体で表現している。」と述べている。幼児は、自分の思いを言語と非言語の全てを使って行うものである。

言葉で思いや考えを伝える場面では、幼児の場合、語彙力等の技術的な側面より内面から湧き出る思いが大切である。幼児自身の思いが内面から湧き出てくるための、楽しさを実感できる遊びのある環境構成が必要である。

幼稚園において、幼児が教師との信頼関係を基盤に安心して過ごせる自分の居場所をみつける事が第一段階である。次に、園内の空間・物的環境に慣れ、応答することで、自分が「ここにいる」実感を感じる第二段階。更に、教師に対して依存と自立を行き来しながら、他の幼児の存在へ意識を持ち、関わりを求めるようになる第三段階である。この第三段階の道筋

を幼児自身が通って安定すると、自分以外の人や環境へ向かい、自ら話をしたくなる様子が見られるようになる。

非言語的な思いを伝える場面では、目の前の幼児が必要としている支援は何かを把握することが大切である。幼児の行動の前後の関係性、幼児同士のつながりの把握、教師による肯定的な視点をもった幼児理解によって、その思いを汲み取り、推し量ることによって次の発達段階での支援の方向性が見えてくる。これらを踏まえ、幼稚園において幼児が言葉で表現したくなる条件を『保育内容 言葉』（無藤隆/高杉自子 編）を参照に表 1 にまとめた。

表 1 「幼児が言葉で表現したくなる条件」

①話したいことがあるかどうか (幼児自身における必要性)	②話したい相手がいるかどうか (幼児に対する応答性)
・「これは、何かな？」 (興味・関心) ・「こんなことがあったよ！」 (感動・発見) ・「こんなもの作ったよ！」 (自己有能感) ・「こんなことできたよ！」 (自己存在感) ・「これは、どうかな？」 (試す・工夫・挑戦) ・「おともだちと一緒に、こんな事したよ！」 (連帯感・仲間意識)	・ 幼児の思いを受け止めてくれる教師 ・ 共感してくれる友だち ・ 自分の好きな友だち ・ クラスのみんな ・ 幼稚園のみんな

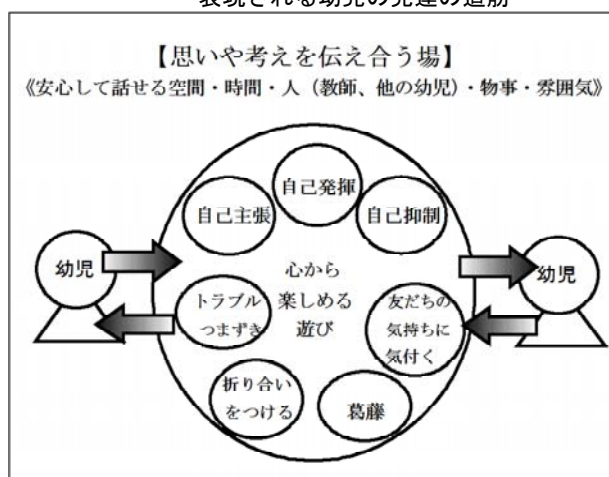
幼児が自分の思いや考えを言葉で表現するために必要な環境構成としては、

- ・ 安心して話せる空間・時間・物事(環境)
- ・ 安心して話せる雰囲気(温かい人間関係)
- ・ 心から楽しめる遊び(感動体験)

がある。遊びを通して、物作りに没頭したり、できなかったことができるようになったり、新しい発見があったり、友だちと共感したりする。それらによって、身近な教師、友だち、グループの仲間、クラスの仲間、幼稚園のみんなへ伝えたい思いが湧いてくる。湧き出した思いや考えを表現できる場を遊びの中で経験したり、意図的に設定し、幼児なりの表現に応答するための援助を行う。

思いや考えを伝え合う場の設定によって、幼児は自己表現をするようになる。その姿から幼児が通っている発達の道筋を理解することができる。(図 1)

図 1 思いや考えを伝え合う場の設定によって表現される幼児の発達の道筋



(2) 粘土遊びを通した思いや考えを伝え合う環境構成とは

幼稚園教育要領における領域表現は、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」とある。

園生活において、幼児が感じたことや考えたことなどを自分なりに表現する姿が、多くの場面でみられる。幼児自身が感じたままを表現している姿が多く、幼児同士の関わりが深まったり、広がったりすることで、次第に相手に伝える表現が増えていく。それは、幼児同士の関わりに関連していると言える。

様々な表現をする幼児の姿から、教師は幼児の表現したい内容を汲み取り、時には話し合い、幼児にとって必要な環境を共に再構成して幼児の実現したいことを支援していく。幼児

が表現する姿と幼児の発達の道筋を教師が予想した内容を織り交ぜ、環境を構成することで幼児の表現を引き出す事が可能となる。

園生活の中で幼児が表現する内容は、「言葉・表情・動き・歌・音・色・形・手触り・素材・遊びなど」様々である。その中で、粘土遊びにおける表現活動は、「幼児の言葉、作品作り、遊びの交流などそれぞれの表現」を引き出すのに適した教材である。

今回その粘土遊びを取り入れ、幼児の思いや考えを引き出すための環境を設定する。そのことにより幼児は、作品作りや作品を用いた遊びの中で友だちとの関わりを増やし、遊びに夢中になっていく。前述の安心して話せる条件づくりにも適していると言える。

幼児は、遊びに夢中になると遊びの中で経験した楽しさや感動を自分以外の誰かに伝えようとする。初めは身近な教師へ伝えるなどの姿が多く見られるが、次第に友だちへ向かうようにするために、幼児の姿に合わせ環境の再構成を繰り返し行う事が大切である。

表2は、遊びの流れを場面ごとに表し、「思いや考えを伝え合うための遊びの環境構成と援助について、まとめたものである。

表2 「思いや考えを伝え合うための遊びの環境構成と援助」

	環境構成	援助（人的環境としての教師）
導入場面	空間 ・遊びのイメージを膨らませるための共通の題材を提示する場の設定	・これから展開する遊びに関連する絵本、紙芝居、ペープサート、指人形、楽器などの教材や素話などを用いて、視覚・聴覚を通した心地よい感覚を刺激する。
	時間 ・幼児自身、友だちに目を向けるきっかけとなる場の設定	・これから展開する遊びへ、自分なりに又は、友だちと似通ったイメージや期待感をもてるような、視覚教材、素話、実物の提示などをする。
	時間 ・遊びへの期待を高め、意欲を持続して遊びへ移行できる時間設定	・遊びへの移行がスムーズに行われるよう、幼児の遊びへの気持ちの高まりに合わせた導入の流れ、時間配分を状況に合わせて行う。
遊びの場面	空間 ・一緒に遊べる場の設定（場の共有、遊びの共同）（関係の中の自己）	・幼児同士の親近感につながるような言葉かけをする。 ・周りの幼児の遊びに気付かせる。 ・遊びどうしをつなげるきっかけを作る。 ・共同作業としての教師の関わりをする。
	空間 ・同じ物を使う場の設定（物の共有、同じ物を使う連帯感、自己主張、折り合いを付ける、自己抑制の場）（数量、種類、分類への気付きの場） ・片付けやすさを見通した配置（遊びの連続性を支える場の設定）	・同じ物を使う安心感、連帯感を感じさせる言葉かけをする。 ・同じ物でも、異なる遊び方が生まれることに気付かせるような言葉かけをする。 ・新しい発想が出る新鮮さ、驚き、憧れにつながる言葉かけをする。 ・共同作業としての教師の関わりをする。 ・物を通じた貸し借りや幼児同士のイメージの相違を橋渡しするような言葉かけや援助をする。
	空間 ・幼児自身が素材、道具、遊具などを選べる場の設定（自己決定、自己判断の場）	・教師が精選して提示した素材、道具、遊具などの中から、幼児自身が遊びに必要な物、試したい物などを自分で自由に選べるような雰囲気と言葉かけをする。
		・幼児の遊びに必要な素材等が足りない場合は、共に考えを出し合い、

		(自己主張、折り合いを付ける、自己抑制の場合)	探す、代用するなどの解決へ向かうようにする。 ・教師が精選した素材など以外の物を幼児が使用している場合は、第一に、幼児の意図するところを推し量り、認める。次に相談を繰り返し、安全性を考慮しつつ幼児の思いが実現できるよう、臨機応変に援助の方法を変えていく。
		・遊ぶ場の移動、配置の転換	・遊びの交流、遊びの進展、仲間関係の変化を捉えた教師の援助によって、新たなイメージや仲間関係づくりを促し、遊びの停滞を動かす。 ・遊びを一人で深めたい様子などが見られるときは、個と集団での遊びが行き来できるよう、個と集団のバランスを考慮した援助を行う。
	時間	・前日までの遊びの様子に合わせた、本日の時間配分(柔軟な時間配分) ・遊びに夢中になり満足できる時間の確保	・「幼児が満足しているか?」「自己発揮のためにももう少し時間が必要」などの視点で遊びに必要な時間を捉え、時間の確保をする。 ・友だち関係作り、仲直り、新しい遊びの共有などにも視点を置き、必要な時間を考慮し、遊びの前後の全体活動に合わせて臨機応変な時間枠の変動を行う。
振り返りの場面	空間	・幼児の良さや幼児なりの表現を認め、言葉にして、相手に伝わる喜びを味わえる場の雰囲気作り	・幼児の良さ、工夫している姿、思いやりの姿などを教師が見つけ、クラス全体の話題にする。 ・幼児同士の遊びに気付かせる言葉かけをし、幼児同士が目を向け合ったり、安心して自分らしさを発揮できよう言葉かけや仲介役、言葉を補うなどの援助をする。 ・遊びのすぐ後の振り返りの時間に、伝えられなかったことは、おやつ前の静かな場、帰りの会の中など別の場で話せるよう、話せる場の確保をする。
	時間	・幼児の発達を考慮し、段階を経て人の話を聴く時間の長さを調整し設定	・幼児の話を聞く、聴いてもらう心地よさを感じられるよう、時間配分を長すぎないようにする。 ・話す内容がバランス良くなるように場面での切り返しを取り入れる援助を行う。

2 教師の援助について

(1) 言葉による表現を支えるための教師の援助の方法

身体・言語・音楽・造形を含む、幼児の様々な表現活動を教師は援助する。園生活の中で、幼児との信頼関係が確立され、教師の肯定的な視点を持った幼児理解が行われることによって、幼児が安心して自己表現できるようになっていく。自己表現できるようになった幼児は、次第に友だちへ意識を持てるようになっていく。

幼児が友だちと思いや考えを伝え合うためには、言葉による表現が必要になってくる。幼児期は、自分の思いや考えを言葉だけでうまく表現するのは難しい時期である。教師が遊びを通して幼児と共に活動する中で、目の前の幼児が「どのような言葉を発したいのか?」「友だちとつながりたくて使った言葉なのか?」など、幼児の行動の様子と照らし合わせ、推し量ることが必要である。幼児が、教師を寄りどころとしながら友だちとの関わりを深めていく中で、教師への依存と自立を繰り返す過程を大切に、言葉による表現を支える援助を行う。

幼児が思いや考えを伝え合うために必要な、言葉による表現を支えるための教師の援助とその内容について、『保育内容 言葉』(有賀和子)を参照に表にまとめた。

表3 「言葉による表現を支えるための教師の援助とその内容」

教師の援助	教師の援助の内容
①通じ合う (目に見えない言葉の交流)	○幼児と同じ動き、同じ遊びをするなど、幼児の心に添う事による信頼感の確立。 ○いつも人間として子どもと対等な立場で共に暮らしたいと思う教師でいること。 (信じる立場から信じてもらえる立場への変容、対等な人間関係の確立)
②聞き手となる	○幼児の気持ちになって、話を聞く。 ○幼児のペースに合わせてゆったり聞く。
③語りかける (子どもの心と共に在る) (からだで語りかける)	○幼児のことばや行動を引き出すための優しい語りかけ、励ましの語りかけ、幼児の興味・関心や心を向けた語りかけをする。 ○スキンシップや寄り添うなど。
④対話の相手として	○応答性のある対話。(幼児の話をしっかりと受け止めて聞き、それをまた話したくなる方向で返していく)
⑤ともに考える教師 (幼児自身が考える機会)	○幼児が遊びの中で考えようとしていることなどを表している姿を通して読み取り、幼児のペースに合わせて補足、言い換えなどの援助をする。
⑥幼児自身が自分の表現 を確かめる機会につな げる	○幼児のつぶやきを教師が繰り返したり聞き返したりすることで、幼児自身が自分の言葉のもつ意味に気付き、考えが整理されていくことを援助する。
⑦経験の共有へつなぐ	○幼児が心を動かし表現している姿と教師が共に在ることで、たくさんのことばを使い、楽しさや喜びを感じ、内面のイメージを表現していく過程を援助する。
⑧多様な経験へつなぐ	○ことばによる幼児同士の交流の仲介、補足、発展に向かうことばかけを行い、幼児同士の経験の共有、共有の喜び、より多くの経験の共有への意欲につなげる。
⑨多様な表現へつなぐ	○幼児の思いを受け止め、気持ちを伝えられるようにことばをそえたり、表情で対応したり、質問したりして、場に応じたことばの使い方や多様な表現の仕方に気付かせていく。
⑩言語環境の主演として の教師(モデル的役割)	○教師の人とかかわり方や表現の仕方、応答の仕方がモデルとしての教師となる。 (聞き手、話し手、演じ手、イメージを実現へむける、多様な表現を引き出す、幼児同士の話し合いのきっかけをつくる、言葉遊びを楽しむ相手などの様々な援助)

VI 保育実践

1 検証保育までの実践と本時の取り組み

自分らしい表現を出し合える場、友だちと一緒に遊ぶ楽しさを経験できるよう、幼児の実態と現在の発達の状況を考えて、以下のような取り組みを行った。

検証保育までの実践

幼児の活動	○ねらい ・ 内容	◎環境構成	* 教師の援助
5月24日 1回 「大型積み木で 遊ぼう」	○一つの教材を使い、クラスみんなで楽しむ。 ・ 個々のイメージを出し合って遊ぶ楽しさを味わう。 ・ 友だちと一緒に遊ぶ楽しさを味わう。		
6月16日 2回 「自分のあおむし を作ろう」	○自作のあおむしにオリジナルの名前を付け、ごっこ遊びを楽しむ。 ・ あおむしのぬり絵を切り取る。 ・ オリジナルの名前を考え、名札を付ける。 ・ あおむしを通して会話や遊びを楽しむ。		
6月20日 3回 「粘土で好きな物	○粘土の感触や自分の好きな表現を 楽しむ。		

を作ろう」	・自分のやり方で、作る楽しさを味わう。 ・作る過程で、友達の方法に気付き取り入れたりする。	
6月22日 4回 「あおむしのお庭で遊ぼう」	○友達と共通の場とイメージを持ち、一緒に遊ぶ楽しさを味わう。 ・あおむしのいろいろな遊びを考え、友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わう。	
6月24日 5回 「虫のお庭をろう」	○草や、寝床など、虫の好きそうな場を折り紙や画用紙などで表現する。 ・草、トンネルなど、友達と考えを出し合いながら楽しく作る。	
6月27日 6回 「粘土で遊ぼう」	○粘土の技法を経験する。(だんご、へび、積み重ね) ・知っている技法を友だちの前で発表し、デモンストレーションする。 ・初めて経験する粘土の技法に挑戦する。	
6月28日 7回 「粘土で虫を作ろう」	○昨日の技法の経験を取り入れ、「虫」(空想 想像上の虫も可)を作り、虫のお庭で遊ぶ。 ・自分のイメージを表現し、友だちの表現を認めたり、まねしたりして、遊びを広げる。 ・園庭を散歩しながら、虫の世界を観察する。	
6月29日 8回 本時 「世界にひとつの虫を作って虫のお庭で遊ぼう」	○昨日の虫を様々な材料と組み合わせて進化させたり、虫のお庭で遊ぶ楽しさを味わう。 ・日常の用品、自然物などの材料を使ってオリジナルの「虫」作りを楽しむ。 ・自分や友だちの思いや考え、良さに気付く。	

2 検証保育指導案

	幼児の姿	○教師の援助 ★幼児なりの表現を出し合えるような援助 (仮説2)	・環境構成 ◎場と素材の提示 (仮説1)
導入 ↑ 遊びの場 ↑ 作業仮説(1) 作業仮説(2)	○そら組、遊戯室に集まる。 ・今日の活動の内容を聞く ・遊ぶ中でのルール、安全確認をする。 (目・耳・心で聴く)  ・4枚の大型粘土板の好きな場所へ座る。 ・粘土遊びを通して自己表現、友達との関わりを楽しむ。 ・新しいものを作り出す楽しさを味わう。 ・自分とは異なる友だちの表現、考えに気付く。 ・作成途中や作成後、遊びに変化が生まれ、自分たちが遊びを変化させている満足感を味わう。 ・友だちの様子をそばで見	○指人形を用いて、『粘土で遊ぼう！(あおむしのお友達、世界にひとつの虫を作ろう！)』の説明をする。遊びへといざなう。 ○素材・材料・道具の安全な扱い方を全員で確認する。(大事な話を聞く態度を意識させる) ○友だちの作品をけなしたり、ちゃかしたりしないよう約束をする。 ★「虫のお庭」の説明をする。 ★大型粘土板1枚につき6～8名で使用するよう説明をする。 ★自分で座席を決められない子には、配慮する。 ★イメージが浮かびにくい子へは、友だちのしていることへ目を向けさせたり、教師も共に遊び、共同作者としての支援する。幼児同士のつながりへ導く。 ★幼児の表現を認め受け止め、幼児の安定感を支え、幼児自身の表現に自信を持たせ、喜びを感じ取れるような言葉をかける。 ★活動の途中で、面白い発想や、ユニークな工夫を見つけ、クラス全体へ知らせる。 ★作品が早く仕上がった子同士、遊べる場「虫たちのお庭」を用意し、子どもたちの遊びを広げる。(思い思いの表現を出し合う場)を用意し、子どもたちのごっこ遊びを広げる。	・指人形と小道具の用意。 ◎創造力を引き出せるよう虫を進化させるための材料を精選し豊富に用意する。 ◎落ち葉や身近にある小物を紹介し、種類や数に配慮する。(洗濯ばさみ、スプーン、小枝など)  ◎「虫のお庭」を用意。 ◎大型粘土板を用意。 ・全体と個を見る視点を持った教師。 ・幼児の良さに視点を持った教師 ◎遊びの様子に合わせて、イメージや作品の差を考慮し環境の再構成を行う。 ・「自分にできるかな」

↓ 振り返りの場 ↓	ている子もいる。 (間接的な遊びへの参加) ・仕上がった作品を思い思いに飾る。 ○友だちと一緒に片づける。 ○作品の傍に円になって集まる。 ○先生の話聞く。 ○きょうの ・楽しかったこと ・がんばったこと ・お友達の良かったことを発表する。 	☆遊びに入りにくい子へは、表情や場面の様子から、幼児の伝えたい思いを推し量り、必要な言葉かけや援助をする。 ☆作品の仕上げを促し、「虫たちのお庭」へ飾るよう知らせる。 ☆片づけを自主的に行っている子を認め、よいモデルとして全体に知らせる。 ○作品作りが今後も続くことを伝え完成できるまでの時間を保障する。 ☆ふりかえりに入る前に、話し方、聞き方のポイントを確認する。友だちの作品の良いところ、友だちにもらった親切などを話し、拍手で応える。 ☆ふりかえりの場面で、みんなの力が一つになったことへの称賛と連帯感を感じるような言葉かけをする。 ☆認められる経験を要する幼児の話題を取り入れる。 ○作った作品はそのまま飾り、明日への期待を持てるようにする。	「友だちと一緒にやりたい」などの、一人一人の幼児理解に努める視点を持った教師。 ・静かな音楽を準備する。 ・幼児の良さを見つけ、友だちに気付かせる視点を持った教師。 ◎半円形に座り、どの位置からも互いの顔と作品が見合えるようにする。 ◎子どもたちの様子に合わせ、振り返りの時間内容に変化を付ける。
---	---	--	--

VII 結果と考察

1 「作業仮説(1)」の検証

(1) 結果【主体的な活動となるような場と素材の提示】

これまでの保育においては、個々の幼児に対し1枚の粘土板を用意し、粘土や粘土ペラを使用しての展開を行ってきた。今回の検証では、大型粘土板を用いてみんなで遊べる場、身近な素材を設定した。幼児同士の会話や関わり、作品づくり、人前での発表などの場面を引き出し、幼児に自信を持たせ、自己表現を楽しませることをねらいとしている。

次の表は、手だてとして行った主体的な活動となるような場と素材の提示によって、みられた幼児の変容を時系列で示したものである。

月日	環境構成	幼児の姿 (表1参照)	教師の読み取り
3回 6/20 粘土で好きな物をつくろう	・粘土と粘土板を用意し遊びを促す。 (個人用の粘土版、粘土のみを使用) 環境構成(場)の工夫を行う	・約8割の子が、同じ遊びの繰り返しをしている。 個々のイメージ表現 (粘土板の型に粘土を押しつけ絵型遊び) ・2～3人、ごっこ遊びへ展開するが、遊びの停滞が見られる。 	・同じ表現方法で楽しむ姿を大事にしたい。(仲間意識、連帯感の芽生え) ・粘土遊びの技法を知ることによって自己表現の方法が増えるのではないかと。(次回へ生かす) ・個々の経験の差を理解し、教え合う経験にし、自信につなげたい。

8回 4/29 世界にひとつの虫を作ろう 虫のお庭で遊ぼう 	・ 落ち葉や身近にある小物を素材として、種類や数に配慮し用意する。(洗濯ばさみ、枝、葉っぱなど) ・ 素材を選び、片付けをしやすい環境(自然物は黄色い表示、生活雑貨は、水色の表示) ・ 図鑑、虫の本掲示 ・ 虫の庭提示(これまでに幼児が作った遊び場、家、ベット、図書館などのイメージが、広がっている。)	・ 前日までのイメージをもとに、新しい素材に興味を持っている。 ・ 友だちと一緒に使う素材を決めたり、使い方の工夫を分かち合ったりしている。(興味、関心、発見の共有、仲間意識の育ち) ・ 素材を取り入れることで豊かになった表現を言葉で表している。「見て！見て！こんなの作ったよ！」(自己有能感)、「マシュマロみたい」(発見の感動、仲間意識)、「粘土の虫でかくれんぼしよう！」(友だちとの連帯感)など、友だちと会話による交流が増えている。 ・ 黙々と自分なりの表現をしている子もいる。(作品へのこだわり、工夫、挑戦) ・ 振り返りの場面で、今まで消極的であった子が、発言したがる姿もみられた。(楽しさの表現) ・ 友だちに言われて嬉しかった言葉を発表し、互いの良さを見つける視点が芽生えている様子もみられる。(友だちへの気付き)  	・ 同じ環境の中で、個々が体験している異なる発達の道筋を表現している。 ・ 粘土と素材の組み合わせによって、量的に大きい表現、質的に細部にこだわった表現、まねなど、個人、全体共に、表現の仕方がダイナミックになっている。  ・ 言葉を使う表現も、個人、全体共に増えている。 ・ 遊びの停滞、表現方法の迷い、没頭しているかどうかなど、様々な要因を考え、幼児の気持ちに近づこうと努め援助を見極める。
---	--	---	---

(2) 考察

粘土遊びを行う中、環境構成の工夫として大型粘土版、粘土と組み合わせる素材、粘土で作った作品で遊ぶ場を提示したことによって、多様な表現をし、技術的な表現力や工夫をしたり、友だちとの会話が増え関わりを持ったり、仲間に入れるようになったり、人前で発表するようになったり等、様々な幼児の変容がみられた。このことから、主体的な活動となるような場と素材の提示によって、幼児の自己表現を引き出したと言える。

2「作業仮説(2)」の検証【幼児なりの表現を出し合えるような援助】～個の育ちから～

(1) 結果

H子は入園当初より、クラス全体での集会や遊びなどに参加せず、一人で過ごす姿、教師を求める姿が多かった。H子の言動とアンケート結果から自分に自信を持って自己発揮できるような手だてを最も要している幼児と捉えた。

ここでは、H子に焦点をあて、言葉かけ等の援助で幼児がどのように変容していくかをみていきたい。

下の表は、保育の場面によって講じた言葉かけ等の手だてとH子の変容を示すものである。

	H子の姿	教師の読み取り	手だて（表7参照）	H子の変容
① 集会	一人別の場所に居るか、おしゃべりで場を過ごす。	・不安や自己満足できない要因があるのではないかな。	①通じ合う ・察する、理解する ②聞き手となる ・審判せずに聴く	・自分の感情や身近に起きた不快な出来事などを教師に話し、解ってもらえる安堵の表情が見られるようになった。スキンシップが十分であったり、H子の思いや考えに近づけた時は、落ち着いて集会にも参加した。
② 大型積み木	初めは、一人傍観している。教師の誘いに応じ場と遊びの共有から、数人との関わりを持つ。	・きっかけを与えれば、友だちとつながる楽しさを感じているのではないかな。 ・H子のアイデアや思いを友だちへ橋渡ししている。認められる経験をする自信へつながるのではないかな。	⑦経験の共有へつなぐ ・共感し、仲間として楽しむ ⑧多様な経験へつなぐ ・考えを尊重し、相手につなぐ ⑩言語環境の主役としての教師（モデル的役割） ・提案時の言葉や態度を示す	・一人傍観する姿から、誘いに応じ、共に楽しむ姿へ変わっていった。自分の考えが受け入れられ遊びに変化をもたらす経験により、遊びに没頭し、友だちとの関わりを楽しんでいった。 H子「次は、雪の国にいこう。」 S子「いいね～。雪だるま作ろう。」 H子「雪合戦もしよう。」 ・互いのイメージを出し合い受け入れ合う姿がみられるようになった。
③ 粘土遊び	自分の作品作りや遊びに積極的に関わっている。友だちの良さを受け入れている。	・H子自信が安定してきたのではないかな。 ・遊びに夢中になって楽しみ、友だちの良さを受け入れるゆとりもでてきたのではないかな。	*①～⑩も行う。 ⑥幼児自身が自分の表現を確かめる機会につなげる。 ・H子の良い発言をとらえ、復唱し、クラス全体へ知らせる。 ⑨多様な表現へつなぐ ・伝える言葉を共に考え、使えるようにする。	・教師に良さを認められたRちゃんのことを「確かにそうだ～。Rちゃん、粘土博士だ！」と、友だちの良さを認める姿になった。 ・粘土遊びに夢中になり、「（自作の粘土の虫で）一緒ににかくれんぼしよう！」と友だちを誘い入れ、「このお花美味しいよ！」など、新たな遊びを展開していった。 ・発表の場では、「心の中の言葉だった。」と、自己内で発した言葉を表現したり、友だちとの関わりで嬉しかったことを人前でも、話すことができた。

(2) 考察

H子の安定を第一に考え言葉かけ等による援助をしていくと、「自己安定→遊びへの意欲→友だちとのやり取り→集団意識」と、少しずつ「自分」から「相手」へ気持ちが向かうようになっていった。相手に気持ちを向けるようになったことで、相手の考えにも耳を傾け、自ら遊びへ誘うなどの積極的な遊びへの参加や人前での発表などの自己表現をするようになっていった。教師の言葉等による援助によって、自分の思いや考えを自信をもって伝え合うようになっていったと言える。

3 アンケートの結果からみたH子の変容

(1) 結果

幼児が自信を持って、自己表現できるようになることを目的に、表面では計り知れない幼

児の内面理解の手だての一つとして、幼児一人一人の自尊感情尺度アンケート調査を検証前と検証後に行った。その中から、次の5項目を抽出しH子の変容を見る。

《H子の自尊感情尺度の変容》

『東京都教職員研修センター平成22年度紀要 自尊感情尺度』

項目	ア	イ	ウ	エ	オ
検証前	2	3	1	1	1
検証後	3	4	4	4	3

ア あなたは、自分の事が好きですか
 イ あなたは、みんなが言っていることをちゃんと聞くことができますか
 ウ あなたは、みんなの役に立ちたいと思いますか
 エ あなたは、他のお友だちの気持ちが分かりますか
 オ あなたは、あなたのことを解ってくれる人がいますか
 4…とてもそう思う 3…少しそう思う
 2…あまりそう思わない 1…ぜんぜんそう思わない

検証前と比べて検証後では、全ての項目において、「とてもそう思う」「少しそう思う」と答えている。特に「みんなの役に立ちたいと思いますか」「他のお友だちの気持ちが分かりますか」については、1から4へと著しい変容がみられた。

(2) 考察

H子なりの表現を教師や友だちに認められたことで、自分に自信を持って友だちと関わることができるようになってきた。「(みんなと) やらない」「H子は、これやる」などの自分本位な言動が多かった姿から、H子の興味を引き出す楽しい遊びがあることによって、自作の粘土の虫を媒体に「かくれんぼしよう!」「このお花美味しいよ!」など、友だちとのやり取りが増え、楽しめるようになっていった。これらのことから、自尊感情が高まり、自分の思いや考えを伝え合えるようになってきたものと考えられる。

4 全体的な結果と考察

(1) 結果

ここでは、アンケート結果から作業仮説(1)(2)について、クラス全体を対象とした結果と考察を行う。22項目の中から、「幼児自身に関する項目」と「相手との関係性の中での項目」に視点をあてた3項目に絞り、検証を行った。

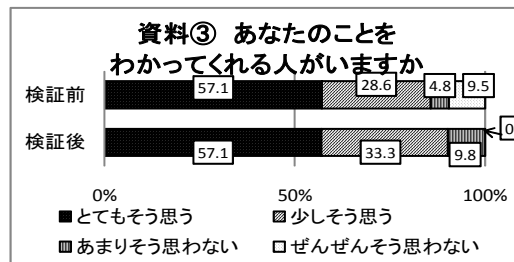
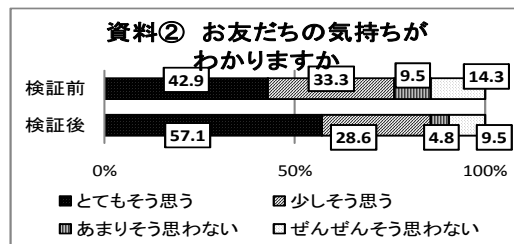
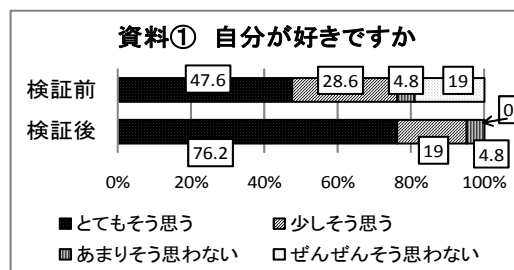
在籍24名中、欠席・休園児を含まない21名を対象に実施した。

資料①の「自分が好きですか」という質問に対して、「とてもそう思う」と答えた幼児が、検証前47.6%から、検証後76.2%に増えた。

「ぜんぜんそう思わない」と答えた幼児は、検証前19%から、検証後0%になった。

資料②の「お友だちの気持ちが、わかりますか」という質問に対して「とてもそう思う」「少しそう思う」と答えた幼児が、検証前76.2%から検証後86.7%に増えた。逆に、「あまりそう思わない」

「全然そう思わない」と答えた幼児は検証前23.8%から検証後14.3%に減った。



資料③の「あなたのことをわかってくれるひとがいますか」という質問に対し、「とてもそう思う」「少しそう思う」と答えた幼児に、あまり変化が見られなかったものの、「全然そう思わない」と答えた幼児は、検証前9.5%から検証後0%になっており、全体として自分自身の事を分かってもらっていると感じた幼児が増えた結果となった。

(2) 考察

資料①の結果から、粘土遊びを通してオリジナルの虫を作ったり、作品について発表するなど、自己表現ができるようになってきた。更に、友だちに自分の表現を受け入れてもらったり、認められる経験を重ねたことで、自分に自信を持ち、自分を好きになっていったものと考ええる。

資料②の結果から、遊びを通じた友だちとのやりとりの中で、「こんなのができたよ!」「どんなしたの? やりたい!」など、少しずつ互いの思いや考えが伝わったことを実感していった様子がみられた。友達との関係が深まり心にゆとりが生まれ、友だちの気持ちをわかろうとする気持ちが芽生えてきたものと考ええる。

資料③の結果から、幼児自身が自分を好きになり自信を持ち、気持ちが安定したことで、友達を理解しようとするようになった。さらに、友だちに「教えてもらった」「認められた」「遊びに誘われた」などの経験を通して、幼児一人一人が、友だちに受け入れられている事を感じる様になり、自己の存在感をクラス全体の中でも実感しているものと考ええる。

Ⅷ 研究と成果と課題

1 成果

- (1) 幼児が思いや考えを伝え合うために、伝えたいような環境構成の仕方と、幼児のコミュニケーションとしての表現における援助の方法を表に整理し実践したことによって、幼児が表現しやすくなる環境構成と援助の方法が見えてきた。
- (2) 幼児一人一人の安定に視点をおいて援助に取り組んだことで集中力や意欲が高まり、様々な方法で自己表現するようになっていった。更に、友だちとのやりとりへ発展し、幼児自身が自己表現を受け入れられる経験により自信を深め、相手の存在や考えなどにも気付いていった。

2 課題

- (1) 一人一人の自己表現を受け止める際、個を見る視点と全体を見る視点のバランスを工夫する必要がある。
- (2) 発表する幼児の言葉ばかりを中心に展開するだけでなく、聞き手の幼児との交流を工夫する事によって、思いや考えをより伝え合えるよう継続して研究する必要がある。

《主な参考文献》

- 『幼稚園教育要領解説』 文部科学省 フレーベル館 2008
『幼児理解と評価』 文部科学省 ぎょうせい 2010
『事例で学ぶ保育内容 領域 表現』 無籐隆・浜口順子 萌文書林 2007
『保育講座 保育内容 言葉』 無籐隆・高杉自子 編 ミネルヴァ書房 1990
『東京都教職員研修センター平成22年度紀要』 東京都教職員研修センター 2010
『教師のさまざまな役割』 秋田喜代美 チャイルド本社 2000